

「ぼくはいきるときめた」

校長 大澤 敬

早いものでもう12月、平成28年最後の月になってしまいました。今年最後の月、期末テストも終わり、気も緩みがちですが、気持ちよく終業式が迎えられるよう頑張っていきたいと思います。

さて今日は、最近横浜市で起こったいじめ事件について書こうと思います。報道されているので知っている人も多いでしょうがざっと概要を説明します。

原発事故で横浜市に自主避難してきた小学校2年生の男子児童が、名前に菌を付けて呼ばれたり、原発事故の賠償金があるだろうと遊ぶお金を要求されたりといういじめを受けた結果、学校に行けなくなってしまいました。6年生の時に母親の目の前で「いままでなんかいも死のうとおもった。でも、しんさいでいっぱい死んだから、つらいけど、ぼくはいきるときめた」と今までのつらい心境を書いて訴えました。中学1年になった現在はフリースクールに通っているということです。学校や教育委員会は適切な対応をしなかったとされている事件です。

この件ではいくつかの点で深く考えさせられました。一つは震災被害者へのひどい差別、偏見です。別の報道によれば「放射能」などとも言われていたようです。自宅や学校が地震の被害にあい、津波で多くの人命が失われ、原発事故で故郷を離れざるを得なくなった人々に対するこのような仕打ちは人間として許されないことです。また小学生がこのような事をするのは大人社会の反映に他なりません。差別や偏見を大人が持っているから子どもは影響されたのです。大人が猛省すべきです。二つ目はなぜ学校や教育委員会、警察はこの問題を早期に解決できなかったかという事です。150万円もの金銭授受は異常です。重大事案として学校も警察も動くべき内容です。金銭授受の事実からいじめの実態を解明し、全力でいじめの解消に尽くすべきでした。この間の関係機関の動きは詳細に検証し、今後同じ過ちを繰り返さないための教訓とすることを切に望みます。

そして何よりも私が心を動かされたのは、この少年の「ぼくはいきるときめた」という毅然とした決意です。小学校低学年の少年にとって、毎日のいじめや金銭の要求は過酷な状況だったはずで、自ら死を選んでも不思議ではない状況の中で、この少年は心が折れそうになりながらも、震災で生きてくても生きられず死をとげたたくさんの人たちの無念さに思いを巡らせ、死を思いとどまったのでしょうか。「ぼくはいきるときめた」という力強い宣言には、何事にも屈しないという強烈な意志を感じます。無念の死をとげた2万人に対する、残った者の「生きなければならない」という責任感を強く感じます。

この少年のご両親はこう述べています。『「子どもは教育を受ける権利を侵害された。友達と楽しい時間を過ごすこともできず悔しい」と訴えた。いじめを受けていた当時の様子について「自殺しても仕方がない内容で、子どもはボロボロになった」と明かした。一方で『死んだら何も言えない。助けてくれる大人が必ずいる』との子どもの言葉を伝えたい」と子の思いを代弁した。』

この少年はきっとこれからも強く生きると思います。その思いに今度こそわれわれ大人は応えてやらなければなりません。震災や原発事故という危険から逃れるために避難したのに、避難した先で生命を脅かされるいじめを受けるなどという理不尽さを許すわけにはいきません。大人への信頼を裏切るわけにはいきません。

皆さんもこれを機会に深く考えてください。忘れかけている震災のこと、それに伴う偏見や差別、いじめのこと、命のこと。「ぼくはいきるときめた」。この短い決意の中に、子どもも大人も、学校も社会も、考えていかなければならないことがたくさん詰まっているのです。

そして最後に。いじめられていたら話してください。助けてくれる大人は必ずいます。